



# 若手の広場



## 若手の会シンポジウム「解剖学からみた脳の機能、生理学からみた脳の構造」について

日本生理学会若手の会運営委員会

国立障害者リハビリテーションセンター研究所

和田 真

第92回日本生理学会大会の若手の会シンポジウムは、日本解剖学会との合同大会ということで、筑波大学・解剖学の増田知之准教授と「解剖学からみた脳の機能、生理学からみた脳の構造」というタイトルで、企画しました。

解剖学会から2名、生理学会から2名の若手から中堅でご活躍されている研究者4名をシンポジストとしました。そして、生命研究を行う上で、構造と機能の面からのアプローチ方法や考え方の違いなどを明らかにし、「解剖学研究者からみた機能（生理）」「生理学研究者からみた構造（解剖）」といった視点で活発な議論を行うことを狙いました。解剖学会には「若手の会」に類するものがない、ということで、私の大学のゼミの先輩にあたる増田知之先生に相談し、解剖学会側の人選をお願い致しました。

解剖学会の後藤仁志先生（京都府立医大）には、「グリコーゲンエネルギー代謝系による終脳発生の調節」というタイトルで、エネルギー代謝と発生について話題提供をいただき、渡辺啓介先生（新潟大学）には、「哺乳類大脳皮質形成におけるDpy19ファミリーの役割」というタイトルで皮質形成についての話題提供をいただきました。そして生理学会からは、肥後範行先生（産業技術総合研究所）から「脳損傷後の機能回復をもたらす脳の変化」というタイトルで、動物モデルで巧緻運動障害がいかにして回復するかについて、生理学・組織化学の両方を用いた研究をご紹介いただき、鳴島円先生（東京女子医科大学）からは「1型代謝型グルタミン酸受容体による網膜一外側膝状体シナプスの成熟型結パタン維持」というタイ



質疑の様子



シンポジウムをおえて

トルで、発生段階における活動依存性の調節について話題提供をいただきました。

シンポジウムの持ち時間が90分であったこともあり、各先生方の発表とそれに対する質疑+αで、ほぼ時間を使いきってしまい、どこまで構造と機能の面からのアプローチ方法や考え方の違い

について議論を深められたかは難しいところでした。しかしながら、すべての発表でベテランから学生まで多くの方からの質問やコメントがあり、熱い議論を交わすことが出来ました。神経科学の研究者という点では共通でありながら、アプローチや分析について、解剖学と生理学の間（ラボの違い？）に微妙に方法論の違いがあることも分かった一方、共通の研究手法も多く、実は非常に近い研究の興味を持っているという驚きもありま

した。手法面だけではなく、ものの見方や考え方についても、学際的な視点を持つことの重要性を再認識いたしました。

今回の若手の会シンポジウムは、学術的な内容をテーマとしたものとなりましたが、今後は方法論や研究者のキャリア形成やワークライフバランス等も含めて、様々なテーマについて、若手の会シンポジウムを企画していきたいと考えております。是非、よろしく願いいたします。